

よそ者の目で宝発掘

宮城人 縁あつて

新たな古里に

⑪完

福島・川俣町▶登米市

【登米祝祭劇場館長】 山田 悅且さん(58)

小説の発刊は、3月に上演される創作劇『登米市民劇場 夢つエヌタ水の里』の原作を担当したことになったときから、山田さんは、この登米の文化委員会が主催する「おじいちゃんのテーマ」を大蔵丸に決め、古代史に詳しい山田さんに執筆を依頼した。山田さんは福島県川俣出身。20年前に劇場の運営に関わる前まで、



職員から報告を受ける山田さん（左）＝登米市の登米祝祭劇場

南方コミュニティ 連合協議会会長 浅野 稔さん(70)



大蔵丸や佐沼高の校歌、はっとと、地元に埋もれた歴史や文化に光を当ててくれる山田さんは、登米地域にとって貴重な存在です。取り組みは決して派手ではありませんが、地域に少しづつ影響を与えています。最近、住民が

征夷大将軍上田村麻呂と争った蟻夷(えみの)の首領として、登米の蟻夷とともに歴史に名前が残る大蔵丸を主人公とした小説『天翔か』(河出書房新社)が昨年1月、出版された。

著者は登米市の多目的文化施設、登米祝祭劇場で館長を務める山田悦且(よしかつ)さん(58)。どう猛然と行動するやがて死んでしまう勇者たち(よしむら)が、勇者たる精神を持ち、過去世に通じる歌集を発刊している。

国家侵略に抗した勇者として描いた「大蔵丸は最後まで地域を守り抜こうした、勇敢な人物が祖先にいた」と登米地域の住民に知つぱり

福島の地元紙で新聞紙で記者生活を送っていた。歌人としての顔も持つ、過去に通じる歌集を発刊している。

現在は館長として市民の文化活動を側面支援するだけでなく、自らの知識や経験を生かした活動にも力を入れる。

95年、佐沼高(糸井重里)から依頼を受け、歌の歌詞選定(しゃくせんとう)、折口雲(くにかげ)が作った同校校歌の詞

を生徒に詠唱する練習を始めた。「言葉は難解だが、真摯(しんし)なメッシュにならぬため、歌詞らしい校歌でなければいけないと解説したい」と意図的取組。

自ら作詞をしたのは、08年度に開校した市立小学校。登米地域の郷土料理はつゆをテーマにした昨年の夢つ

るスマイルの里では、中間入歌「はつぶす者の唄(うた)」市民づくら委員会が主催した昨年の夢つぶす者の視点で地域の玉を義理(ぎり)へと広く発信(はつしん)したい。山田さんが持つ統

率の告知だった。県外出身者として不思議思い続けていることがある。「なぜ、何もかも

れに心地もしない感じた」と振り返る。記者生活に疲れて、新聞社を辞めたのは2000年。登米市に着いたときの提供を移して、即座にまたがる登米祝祭劇場の求人の告知だった。

「絶対力で仙台に就けるのは難しく、がいでも景観や景物が優位に立てる分野はある。登米の住民は地域の良い部分をもう少しアピールしていく」。

大蔵丸のつづり、「強みを生む立ち向かう姿勢が今の登米地域に必要だと感じている。(登米高・柏葉章)

が仙台中心なのか。「北」など、県の中心地を基点とした地域の名前を呼ぶ事は聞いたことがない。県内は県と比べ、地図閲覧等が一分もない

ように見える。

「絶対力で仙台に就けるのは難しく、がいでも景観や景物が優位に立てる分野はある。登米の住民は地域の良い部分をもう少しアピールしていく」。

刺激受ける活動 期待

縁あつて
良き仲間

地域の歴史をもっと知ろうと大蔵丸の勉強会を始めました。地元の会合では、はっと抓み唄が歌われる場面が増えていました。今後も地域の隠れた財産を発掘してもらいたいですね。住民に刺激を与える活動を期待しています。